

研究資料

藥師寺破損佛像整理報告 小林 剛

昨秋九月十月に亘つて、奈良縣藥師寺の收藏にかゝる多數の破損佛像に就いて、整理調査が行はれた。その際實地調査に當られた奈良帝室博物館鑑査官補小林剛氏より左の報告を受けたから茲に登載する。

藥師寺の破損佛像とは嘗て同寺舊西藏、金堂階上及び塔中法光院の倉等に收納されてゐた數多の斷片によつて、今度、不完全ながら纏められた破損像の事である。その斷片の發見経路については、舊西藏がかなり古くから不開の藏として遺棄されてゐたのを、大正五六年頃、その床板が落ち、壁が崩れたのを期として、舊地から稍北寄りに、即ち現在の所に西藏を移建する際、始めて其處に多數の破損像斷片が堆積されてゐるのを發見した。その後、間もなく舊西藏所在斷片の一部を金堂の裏階上に收める爲、そこを整理した所が、又多數の破片を發見した。之等が今度の整理破損像の大部分であるが、その他尙、法光院の倉等からもかなりの像が附加されてゐる。しかし、之等の破損像については、その所傳の状態からも、造顯及び沿革に關する、所謂寺傳と稱す可きものは何も知られてゐない。

之等の破損像はその發見當初に於いても、かなり識者の注意を引いたもので、その中、最近國寶に編入された木造舟形光背の如きは、夙に新納忠之介氏によつて、その大部分の破片が整理されて、光背としての大體の形に造られて居り、又塑像の心木等は殆ど一箱に纏められてゐた。しかし、大部分の破損像

は、その雜多な種類と數量によつて、よし何人かはその中の秀作な斷片に多少の興味を感じた所で、數日位の整理では如何とも爲し難く、心ある人々も、殊に同寺執事橋本凝胤師も唯嘆聲を洩すのみで、今日まで櫃底の埃中に置くの止むなきにあつた。

それが如何なる佛縁によつてか、橋本師の切なる懇望と奈良美術院の明珍恒男氏の厚意によつて、そこに整理の事が始められて、識者の注意を更に喚起するに到つた事は眞に喜ばしい事でなければならぬ。而して、この整理に當つては奈良美術院の城本、白石(弟)兩君の手を煩はし、又橋本師は元より同寺の上森君が終始、自ら進んで整理に努力された事は此處に特記して置かねばならぬ。

この整理は昭和七年九月の初から十月迄、約一ヶ月間に亘つて行つた。先づ整理の第一階梯として、類別的に如來形、菩薩形及び天部神王形等に分け、又時代別的に鎌倉時代以前、同以後及び江戸時代に分ける事にした。この際、破損像中で最も有名であつた塑像心木を約二十箇、新しく發見追加し、又國寶木造舟形光背の斷片數箇を得てゐる。次に、かく分類された破片を、材料の種類及び製作手法等によつて個々一具のものに集めた。この間、尙寺中諸堂宇の隅々までも二度三度と探索して、破片を加へて行つたのは勿論である。かくして、纏められた破片は美術院の人々の手によつて、繋がる可きものは繋がり、取付けらる可きものは取付けられて大體の整理が出来上つた。今、その概略の項目を示せば次の如くである。

塑像心木

一五八箇

小木像群

一四軀 及斷片
一九箇

地藏菩薩立像

一 軀

天王形立像

一 軀 及斷片
七箇

四天王像

四 軀 及斷片

千手觀音菩薩立像

一 軀 及斷片
二四箇

僧形坐像

一 軀

僧形神坐像

一 軀

地藏菩薩立像

一 軀

天部形像腕部斷片

二 箇

如來形坐像斷片

二 箇

大威德明王坐像斷片

六 箇

飛天光背斷片

二 箇 及小片
數十箇

如來形坐像斷片

五 箇

如來形坐像斷片

四 箇

その他

即ち、これによつて見れば、藥師寺破損佛像は、塔本釋迦八相像と推定される小像を除いて、三尺以上の十軀の像が殆ど纏め上げられ、そして五軀の像が或は半身、或は一部取合はされて、それ等の優れた様式手法上の特色が明らかにされ得るに到つたのを知る事が出来る。しかし、之等の破損像個々のものについての研究は、自ら本寺の沿革等にも關係があり、之等を早々に論述する事は出来ないが、此處に單なる報告の程度に於て、之等の破損像及び斷片等について略述して置かう。

塑像心木

一五八箇

内 譯

一、塑土を附着せるもの〔第一、二圖〕

立形 七箇

坐形 一箇

塑土斷片

三箇

二、立形

甲

二〇箇

乙

九箇

丙

五四箇

丁

一〇箇

(註、この甲乙丙丁は挿圖に示す如き心木の構想の差異による。坐形に於いても同じ)

三、坐形〔第三、四圖〕

甲 三六箇(内、柄あるもの三箇)

乙 五箇

丙 四箇

四、馬形

胴體部

四箇

肢脚部

一箇

五、斷片

頭部

四箇

其他

三箇

之等の塑像心木は右にも示す如く、その塑土を附着するものは僅かに八箇に過ぎず、それ等とても殆どすべて單に胴體部にのみ塑土を残存して、その原初の佛は尋ねべくもない。即ち、之等は寧ろ塑像として見るよりも、心木としての興味を多く持つもので、又其處に彫刻史上の重要な資料として、注意する可きものがある。換言すれば、同じ立形の中にあつても四種の異つた構想によつて心木が造られてゐる事等は、その製作時代の自由な手法を知ると共に、亦その一箇の簡單な心木の中にも汲めど盡せぬ時代の感覺が動いてゐるのを見逃す事が出来ない。

この心木は立形にして高一尺二寸位から一尺五六寸まで、坐形にして高七八寸から一尺二三寸位のもので、その大きさ及び數量等からして、藥師寺東西兩三重塔の釋迦八相像と推定される。即ち、かく推定される事によつて、之等の塑像が藥師寺の養老二年に於ける創建頃から、東塔の天平二年に於ける完成頃迄の間に製作されたものであらうと云ふ事は想像するに難くない。又、之等と和銅四年頃に造られた法隆寺五重塔本塑像に比較するに、その様式上の特色は比すべくもないが、手法の類似は全く彼我同一として、製作時代の近似も考へられる。唯、藥師寺像は法隆寺像に比して、立形が割合に多く算へられるのは形相上注意すべき事である。

小木像群

内 譯

一、八部衆立像

阿修羅像〔第五圖〕

一木造彩色 高一尺七寸四分

三面六臂。その前二臂のみを残存してゐるが、他の四臂及び右脚臍部を缺失し、その他缺損も多い。

乾闥婆像〔第六圖〕

一木造彩色 高一尺七寸五分

頭上に獸形の甲を被る。兩手先を缺失してゐる他、破損は少いが、全體に互つて磨損が多い。

第一圖 塑像心木 立形

第五圖 阿修羅像

第一〇圖 天部立像

第二圖 塑像心木 坐形坐裏

第六圖 乾闥婆像

第一圖 俗形立像

第三圖 塑像心木 坐形正面

第七圖 沙羯羅像

第二圖 俗形立像

第四圖 塑像心木 坐形側面

第八圖 鳩槃荼像

第三圖 俗形立像

第九圖 天部立像

第一四圖 異形橫臥像

第一五圖 俗形坐像

第一六圖 大威德明王像斷片

第一九圖 四天王像

第三圖 千手觀音菩薩像頭部

第一七圖 天王形立像

第二〇圖 四天王像

第三四圖 僧形坐像

第一八圖 四天王像

第二一圖 四天王像

第三五圖 飛天光背斷片

第二二圖 千手觀音菩薩立像

沙羯羅像〔第七圖〕 一木造彩色 高一尺七寸四分

頭上髮髻の周圍に蛇形を卷く。左右共兩腕部外側及び手先を缺失してゐる。

鳩槃荼像〔第八圖〕 寄木造彩色 高一尺六寸八分

頭上に數本の角様のものを立つ。頭部及び胴體部共、前後に刳付けられ、内刳が施されてゐるが、その中胴體部の右半を前後とも缺失してゐる。

斷片

胴體部前半 二箇 胴體部後半 三箇 腕部 三箇

銘 柄 足 甲 像 天王四

二、天部立像〔第九圖〕 一木造彩色 高一尺六寸七分

左右兩手先を缺失してゐるが、背面などに美しい彩色を残してゐる。

三、天部立像〔第二〇圖〕 寄木造彩色 高一尺四寸八分

面部額から鼻口に互り、兩手先及び右腰下外側部を缺失してゐる。

四、天部形立像 寄木造彩色 高九寸八分

頭部及び左右兩肩先よりを缺失す。

五、天王像斷片

胸より左腰に互る胴體部 一箇

膝部 一箇 脚部 一箇 天衣 一箇

六、俗形立像

甲〔第一一圖〕 寄木造彩色 高一尺六寸七分

左腕外側及び兩手先を缺失してゐるが、最も美しく原初を残してゐるもの一である。

乙〔第一二圖〕 寄木造彩色 高一尺八寸三分

胴體部後半及び兩手先を缺失す。

丙〔第一三圖〕 一木造彩色 高一尺五寸五分

面部右眼上及び鼻先を缺失してゐる。その形相よりして或は道教徒の像とも思はれるものである。

胴體部前半斷片 長一尺三寸

内面に左の如き墨書銘がある。

釋迦如來

南無八相施再

小俗形立像 一木造彩色 高七寸六分

頭部及び兩腕部を缺失す。

七、俗形坐像

甲〔第一五圖〕 寄木造彩色 高六寸五分

頭部及び兩腕部を缺失す。

乙 一木造彩色 高六寸

頭部及び兩袖先並びに手部を缺失す。

身體部後半斷片 高七寸

八、異形横臥像〔第一四圖〕 一木造彩色 長一尺九分

頭部及び兩腕部を缺失してゐるが、その腹部の肥大してゐる形から、世俗に「孕み佛」と稱されてゐる。恐らく脹滿等の病相であらうが、かゝる異形をこの群像中に含んでゐる事は興味深い。

九、斷片

脚部 二箇 足先部 一箇 沓 一箇 その他 一箇

之等の小木像群は、その様式よりするも、温和な表情、優しい撫肩、やゝ扁平な胴體及び變化の少い姿態等によつて、亦その手法も或は一木に、或は不完全な寄木内刻法によつて自由に造られ、之を割合に浅い刀法に纏め上げてゐる事等によつて、貞觀時代末から藤原時代初頃の造顯が推定されるものである。又、前記俗形立像斷片中の墨書銘に「釋迦如來 南無八相」云々と記されてゐるのよりすれば、之等が塔本釋迦八相像中のものである事が知られる。即ち、之等によつて、それが天祿四年の本寺大火災の頃に於ける塔本像の追補木像であらうと云ふ事が殆ど決定的に云ひ得られる事は、前記塑像心木による釋迦八相像の形相を考究する一助となると共に、その製作年代を明らかにする彫刻史上の重要な作例となるものである。

天王形立像 附斷片七箇（第一七圖）

木造彩色 高（踏鬼共）三尺九寸

本像は左右兩肩先よりの腕部及び右腰側面より中央兩脚間の一部を缺失してゐるが、その様式手法よりして、東院堂安置の國寶二天王像と同一具のものとして藤原時代前期の特色が明らかである。しかしその足下踏鬼が所謂鈍彫に造られてゐるのは彫刻史上の興味ある作例であると同時に、之が前記國寶二天王像に於て、平面な岩座に造られてゐるのは、近世の國寶修理の不注意を示すものとして注意すべきである。

斷片

背の一部より腰下裳まで 一箇 腰下裳部 一箇

脚裳部 一箇 脚部 一箇 右手掌部 一箇 踏鬼 二箇

四天王像 四軀及斷片 木造彩色

甲 高（踏鬼共）六尺一寸七分（第一八圖）

頭部左背面、右手先、左肩先よりの腕及び左脚内側等を缺失してゐる。

その右足柄前面に

南無四天王□也

□永十一年四月廿五日也

研究資料

左足柄前面に

西□□□

との墨書銘があり、又右足柄後面に「乃」の字九字の落書がある。

乙 高（踏鬼共）五尺八寸八分（第一九圖）

頭上髮髻、左手首及び右杳先を缺失す。

丙 高（踏鬼共）六尺一寸五分（第二〇圖）

面部口邊右より顎にかけて、右前腕、左手、右脚大腿より杳先に互り及び左杳先等を缺失す。

丁 高（踏鬼共）五尺二寸五分（第二二圖）

頭部、右前腕、左肩先よりの腕及び右杳先を缺失す。

本像は今度の整理に於ける最も大なる收穫の一に算へられるもので、最初之等四軀の像が幾十幾百の斷片に散つてゐたのは想像する事も難い。而して、今尙之に附隨する斷片が相當に數多く櫃底に残されてゐるのであるから、今後の整理によつて、之等がより完全なものに造られる事を期待する事が出来る。

本像はその様式手法によつて、鎌倉時代のものである事が明らかに推定されるが、又その中の足柄墨書銘によつて「文永十一年」の造顯である事が確かめられる。

千手觀音菩薩立像 附斷片二四箇（第二三、二三圖）

木造漆箔 高三尺三寸五分

本像は頭上から眼瞼迄及び左右兩手の大部分及び兩足先等を缺失してゐるが、兩肩腕部の矧付及び附屬斷片等からして千手觀音と考へられるものである。破損の甚しい中にも優れた様式手法を示すものであるが、寫實的な中にも形式的に固い衣文線を表はす事によつて、ほど鎌倉時代後期のものと推定される。その斷片は殆どすべて、所謂千手に關するものである。

僧形坐像（第二四圖） 木造彩色 高二尺九寸

頭上から面部兩眉間を互り鼻口に到る迄及び左袖外側中央部、その他所々に缺失が多いが、寫實的な衣文線や太く力ある刀法等によつて鎌倉時代後期の造

顯が推定される。

僧形神坐像 木造彩色 高二尺八寸

本像も頭上より顔面殆ど全部及び左袖外側の外、缺失が多い。その頭上の冠及び法衣の下に見える袍等よりして僧形の神像である事が知られる。様式手法共に前記僧形坐像に近く、同じく鎌倉時代後期の特色を示してゐる。

天部形像胸部斷片 二箇 木造彩色

等身天部形像のものと思はれる。一木造に鋭い鰭波式刀法を以て、貞觀時代の特色を明らかにしてゐる。

如來形坐像斷片 二箇 木造彩色

胸部及び膝部の二箇を残すのみであるが、約四尺位の坐像の斷片で、藤原時代のものである。

大威德明王坐像斷片 六箇〔第一六圖〕

木造彩色 頭部自髮際至顎 三寸四分

頭部及び胴體部左半に腕部三箇を附し、この他右腕一及び脚部三箇を残してゐる。明らかな藤原時代の作例である。

飛天光背斷片 二箇 附小片數十個〔第廿五圖〕

木造漆箔 立形天人像高一尺四寸

天人像は立形及び坐形各一軀を残すだけであるが、雲形及び火焰形の斷片は數十箇を算へる。その様式手法よりして藤原時代末頃のものと推定されるが、この天人像を具する光背の斷片は或は最近國寶に編入された舟形光背の周邊に當るものではないかとも想像される。未だその具體的事は精密な調査研究を経なければ斷言することは出来ないが、今度の國寶指定の調査にもこの事が考慮された様には聞いてゐない。注意すべき事ではなからうか。

如來形坐像斷片 五箇 木造漆箔

約三尺位の坐像にして、鎌倉時代前期のものであらう。

如來形坐像斷片 四箇 木造漆箔 膝張長二尺三寸五分

顔面の一部、膝部及び背部二の斷片を残すもので、鎌倉時代後期頃のもの

推定される。

この他、小破片中の重なるものを上ぐれば

左足先（臺座共一本）

右手掌部（國寶十一面觀音像のもの）

明王形像頭部

明王形像頭部右半

頭上小面（前記千手觀音像のもの歟）

如來形左胸部（前記小木像群と同一具のもの歟）

菩薩形右肩部

舟形光背斷片

之等はほんの小斷片に過ぎないものであるが、その製作よりしても相當に優れたもので、殊に之等の中に國寶十一面觀音菩薩像（奈良帝室博物館出陳、貞觀時代）の右手掌部が発見されてゐる事などは注意すべきである。

以上簡單に目録的に列記した藥師寺の破損像は、これだけの記述を以てしても、その種類と數量とが如何に多いものであり、そして又、それ等が時代的にも製作的にも相當に優秀な作例である事が察せられると思ふ。即ち、今その數多い斷片を除いて、ほど完成せられた廿四軀の像を見ても、それ等は皆殆ど國寶的の價值のあるもので、今度の整理によつて、かくも優れた彫像が數多く世に出された事は眞に喜ばしい事ではなければならぬ。古川に水絶えずの喩も、南都七大寺の隨一として、千二百年の寺史を有する藥師寺なればこそ、その感が深い。しかし、之等の破損片がよくその些小な斷片に到る迄、明治以後の所謂好事家の魔手を逃れて傳へられた事は、藥師寺の力強い傳統によると共に、橋本凝胤師の正しい信念によるものである事を思はねばならない。尙、今度の整理には、此處に記述した以外に、數多くの斷片が算へられるのであるが、それ等は大方室町時代以降のものである儘に、一切を省略して置く。